

「子ども」をめぐる光と影 ——ヴァレリー・ラルボーの場合——

瓜生 濃世

はじめに

一般的に、ヨーロッパにおける「子ども」という観念は、フィリップ・アリエスの著作『<子供>の誕生』によって、社会制度の変化のもとで 18 世紀以降に生まれた比較的新しい観念であることが説明されている⁽¹⁾。フランス文学史の流れにおいては、19 世紀ロマン派の作家たちにインスピレーションを与えた「無垢」なるイメージを経て、「子ども」は複雑で多面的な性格を持つ存在として文学の中に登場するようになった。多くの作家が自らの幼少時代にテーマ性を見出し、自伝あるいは自伝色の濃い作品を執筆している。ヴァレリー・ラルボーもその代表的作家のひとりである。ラルボーは、子どもの繊細な心理描写を作品のテーマにとりあげた作家であり、フランス文学史において新たな領域を開拓した。子どもを扱った作品で興味深いのは、子ども時代を解釈する作者の視点であると言えよう。子ども時代を実証的な観点から再現することよりも、子どもの世界観をどのように説明するのか、そこに機能する大人の視線に作家の個性が大きくあらわれているからである⁽²⁾。

ところで、「子ども」に関して、自伝的な側面から領域を広げて注目したい点は、その存在の複雑さそのものである。というのも、「子ども」は常に相反するふたつのイメージを内包していると思われるからだ。それは、大人からすれば子どもは「過去」であり、「未来」であるということである。大人にとって、子どもは自分が通り過ぎた「過去」の姿であり、過ぎ去った時間を想起させる存在である。子どもを見る時、自らの子ども時代と比較してしまうことはそうめずらしくはないだろう。あるいは、明確に思い出さずとも、自分が幼かった頃に抱いた感情や感覚を、無意

識のうちに感じながら子どもを眺めるということは、往々にして起こる現象である。その一方で、子どもはまだ何者でもなく、大いなる可能性を秘め、ただひたすらに「未来」へと向かう存在——自分とは全く異なる者として大人の目に映るのも事実である。このような「過去」であり「未来」である子ども、それは大人からすれば「既知」の存在であると同時に「未知」のものである、という厄介で魅惑的な存在ではないだろうか。言うならば、子どもは自らの過去を投影する「自己」の分身である一方で、自分とは完全に異なる「他者」でもあるということである。本稿では、このような子どもをめぐるイメージに注目し、ラルポーのいくつかの作品における子どもたちの姿をとりあげ、彼らがどのように描かれているかを検討したい。

1. 「他者」である子ども

「子ども」が「大人」と対立した存在として現れることは、20世紀においては見慣れた光景であると言えよう。この対立関係は、子どもの理由なき反抗心を映しているのではない。しばしば「子ども」は「大人」とは全く異質の者であり、その特性を生かして大人の文化や社会、それに根ざす価値観を問い直す存在として現れているのだ。それはまさに、子ども自身が「異文化」として存在することである。独自の視点から子ども論を展開した本田和子は、『異文化としての子ども』の序章において次のように述べている。

そして私どもは、「対立する他者」としての子どもの把え直す必要に迫られる。

[...] 私どもは、既に秩序社会に与し、文化の内側にある。従って、「文化の外にある者」の視座を手に入れ、「非文化」のことで世界を組み立て直すことは不可能であろう。私どもに出来るのは、暗黙のうちに秩序から排除され、無視されているものを掘り起こし、光を当てることである。[...] 子どもという「文化の外なる者たち」の、とりわけ「意味不明」の世界は、そのための恰好のモデルたり得よう⁽³⁾。

本田は、山口昌男の「子どもの世界こそ、人間意識の深層の構造が表面化する第三の領域⁽⁴⁾」であるという言葉を紹介し、子どもたちの「他者性」そして「異文化性」を読み解こうと試みる。つまり、「大人」とは確立された社会に組み込まれ、その規範に従って生きる者なのであり、一方「子ども」ははまだ社会の外部に生きる者であって、その言葉に耳を傾けることは社会を新たな視点から見ることを可能にする。無意味で浅薄に思える子どもの言動も、大人たちの一方的な判断に疑問を付す役目を果たすのである。

多くの子どもが登場するようになった 19 世紀のフランス小説を振り返ってみれば、ヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』に登場するガヴローシュに代表されるような、大人社会の犠牲者としての姿が子どもの特徴のひとつとして挙げられる⁽⁵⁾。大人の都合で不幸な境遇に置かれる子どもたちの存在は、大人の道德感の欠如や社会福祉の不備をあばきだし、一種の文明批判として機能した。そのような子ども像は、いまや古典的とも言えるほど広く浸透したイメージと言えよう。社会的に無力な子どもたちは、制度の欠陥による一番の犠牲者となり、社会の問題点を浮き彫りにする役目を果たしている。しかし、個人の意識に強い関心が向けられるようになった 20 世紀においては、子どもはそのような社会的弱者としての役割を担うにとどまらない。子どもは周囲の人間と衝突しながら、苦悩しつつ、さまざまな夢を重ねる想像力豊かな人間なのである⁽⁶⁾。ラルポーは、そのような子どもの心情を詳細に描き出した。無論、子どもは日常生活において大人の庇護を受ける存在であり、精神的、経済的に独立した状況にはない。だが、小説におけるひとりの登場人物として寄せられる関心は、大人に対するものと何ら変わりなく、そういった意味では大人と同等の地位を獲得したと言えるのである。19 世紀的な社会の犠牲者としての類型を抜け出し、その心理描写が価値あるものとして積極的に行われるようになったのだ。

子どもが「異文化」の持ち主として、つまり大人にとっての「他者」として全く異なる秩序で生きていることは、例えばその言語観から読み取ることができる。ラルポーの短編集『幼なごころ』(1918 年刊行) の一編「包丁」から、その典型的な場面を見てみよう。間もなく八歳になる主人公の少年ミルーは、農機具工場を営む

両親や周囲の大人に反抗心を抱き、父親やその仲間たちの話すいくつかの言葉を捉え、全く別の解釈を行うのである。

それにしても、パパやパパの友達って、家畜の総頭数 (cheptel) だの用益権 (usufruit) だの契約 (contrat) だの抵当 (hypothèques) だのって、どうしていつもわけのわからない醜いことばかり話しているんだろう？ それに大人たちが彼ら独特の言葉でそういう言葉を口にするときの調子ときたら！ 彼ら紳士たちをひっぱたいてやりたい……用益権なんて、草の上に落ちて、十一月の雨の下でしなびて割れて腐ってしまったリンゴみたいだ。抵当なんて、家の白い正面玄関に組まれた真っ黒なこわい足場だ。(p.410)

大人たちが使う言葉の正確な意味はわからずとも、ミルーはその響きから不快なものを感じ、「醜い」と判断している。無論、こういった心理描写の背景には、幼きラルボーが鉱泉業を営む父親に抱いた反抗心がある。幼いミルーは、父親が生きるブルジョワ社会というものを当然ながら理解していないが、大人たちが得意気に使う用語に、直感的に否定的な定義を与えているのだ（「腐ってしまったりんご」「真っ黒なこわい足場」）。大人からすれば一笑に付すこの定義だが、言うまでもなく、これらの言葉の「醜さ」は、金勘定にいそしむ大人たちに差し向けられた言葉である。無邪気な子どもの視点からの大人批判ではあるが、子どもの言葉に対する解釈の独自性というより、正確にはこういった子どもの言葉が丁寧に描写されていることで、子どもが大人と対峙する者として堂々たる地位を得ているとは言えないだろうか。大人が決して思いつかないであろう言葉の定義が提示されることで、子どもの他者性が浮き彫りになり、子どもが大人と対立しうる位置にあるひとりの人間として小説内で捉えられている。三人称で語られるなか、ミルー自身の言葉として提示されるこの一節は、読み手に強い印象を残す。

言葉に注目するならば、同じく『幼なごころ』に収められた「夏休みの宿題」の少年の主張にも注目したい。夏休み後に中等教育の第三学級へと進級する少年は、次のように述べている。

おお、かくも純粋な、かくも忠実な、かくも優しくかつ激しい、秘めやかな情熱 (passion) よ！ 大人たちはそういう情熱を決して知ることはないだろう。彼らには理解できないのだ。どんな言葉をもってしても、こういうことは彼らに理解させることはできないのだ、なぜなら、この友情というものは、いわゆる彼らの友情とは別のものであるからだ。(p.485)

この少年からすれば、自分が抱く「情熱」は、大人の世界に存在するものとは全く異質である。友情に捧げる純粋な情熱は、子ども特有のものなのだ。また、大人のもものと異なるというだけでなく、大人が決して理解できないものであると主張している。ミルーの場合は、大人が用いる言葉をうまく理解できない苛立ちから別の定義を考えたわけだが、この少年は違う。大人たちがもはや純粋さを失っていると分析したうえで、自らの主張の正当性を確信している。言葉が指し示すものは、子どもと大人の間で同一ではない。その内実をめぐり、少年は心の中で、大人に真っ向から立ち向かっているのだ⁷⁾。お互いが用いる言葉と対象物の乖離は、そのまま子どもと大人が生きる世界の断絶を示している。

このように、子どもによる独自の言葉の描写を通して、大人にとっては完全に異質の者である子どもの他者性を見ることができるといえる。非論理的で、厄介な主張をする子ども——それは大人からすれば、近くて遠い「他者」なのである。

2. 「青年化」した子ども

序論で述べたように、大人の視点からすれば「子ども」はふたつの相反するイメージを内包する。ひとつは、前章で見たような、大人とはかけ離れた他者としての子ども、そしてもうひとつは自らの幼少時代と結びつく、分身のような、自己と同一視することが可能な子どもである。後者のような子どもを見ることは、自らの過去を振り返り、ひいては現在の自分についても考える契機となりうる。Marina Bethlenfalvay の言葉を借りれば、「子供はもはや 19 世紀に思われていたような幸福

への案内人ではないものの、自己を知るためのもつとも確かな扉であり続けている⁽⁸⁾のである。自己を知るため、および自己確立するための葛藤は、いまや青年の特権ではなく、若い少年少女も経験するものになった。ラルボー作品においては、例えば『フェルミナ・マルケス』(1910年)の主人公のなかに、そうした心理描写を見出すことができる。

ところで、青春小説の系譜をテーマに論じた私市保彦は、19世紀と20世紀における青春小説の違いを次のように説明している。

青春小説には、青春特有のはてしない夢と激しい恋の思いが描かれる。とりわけロマン派の影を背負った十九世紀の青春小説はそうした特徴をもっていたが、そこで描かれていたのは、大人の世界を目標に苦闘する青年像であった。あるいは、大人になった主人公が青春をとりもどそうとする物語であった。そうではなく大人の世界に対抗するものとしての青春の夢を意識的に描き出す青春小説は、二十世紀にその独自の姿を浮上させてきた⁽⁹⁾。

大人を目標にするのではなく、その世界に対抗するようになった青年——それはまさに、子どもをめぐる状況と類似しているのではないだろうか。子どもはもはや大人社会の欠陥を映し出す役割にとどまらない。前章で見たとおり、ラルボー作品においても、子どもは大人に近づこうとするよりも、全く異なる言葉の解釈を持ち出すような、独自の視点を所有する、大人と対立するひとりの人間として描かれていた。続けて私市は、ラルボーの『幼なごころ』や『フェルミナ・マルケス』に言及し、次のように述べている。

二十世紀の青春小説の幕を切って落とすようにあらわれ、特異な輝きを放っているのがヴァレリー・ラルボーの『フェルミナ・マルケス』と連作短編集『幼な心』である。二作には明らかに共通する雰囲気があり、かりに『フェルミナ・マルケス』を後者の連作に入れても不自然ではない。いずれに登場する子どもも、俗物である大人への嫌悪感をむきだしにする一方、大人に負けまいと無理

な背伸びをする⁽¹⁰⁾。

大人と対峙する力を備え始めた子どもたち、彼らが主人公であるこれらの作品は「青春小説」と位置づけることができるのだ。19世紀においては、「子どもが登場する小説」と「青春小説」ではその趣旨が大きく異なっていたはずが、20世紀になって同じ性質を帯びることになったのである。元々、ラルポーの出世作『バルナブースの日記』に青年の精神的成長というテーマがあることを考えれば、共通したテーマが『幼なごころ』や『フェルミナ・マルケス』の幼い主人公たちにも課されたのだとも言えよう⁽¹¹⁾。

子どもたちが生きる世界の複雑さについて、Marina Bethlenfalvay は子どもの想像力という観点から分析している。見かけ上は幸福な子ども世界の裏側で、実は子どもたちは不安、悩み、悲しみや孤独感を抱いている。そのような状況に対処するために、彼らは強力な想像力を駆使し、内面世界をつくりあげていく。そうした子どもたちを観察した作品に、ラルポーの『幼なごころ』も挙げられるのである⁽¹²⁾。

自己確立を目指し、葛藤する少年たちを描いた『フェルミナ・マルケス』の話に戻ろう。この作品は、1910年に雑誌『新フランス評論』に発表された中篇小説で、ラルポー自身の少年時代の思い出から構想された作品である⁽¹³⁾。舞台となるのは聖オーギュスタン学校というパリ郊外の国際色豊かな学校であり、その後廃校になったこの学校での思い出が、複数の視点から語られる構成となっている。「私たち « nous »」で始まり「この物語を書いた」と述べる「私 « je »」からジョアニ・レニオ、カミーユ・ムーティエ、そしてフェルミナ・マルケスといった登場人物へと視点は移り変わり、それぞれの心理が描写されながら物語は進む⁽¹⁴⁾。ある日アルゼンチンからこの学校へやってきた美少女フェルミナに、少年たちは大いに関心を寄せる。優等生ではあるがひどく不器用な15歳の少年、ジョアニ・レニオもまたフェルミナに憧れ、何とかして彼女に近づくことに成功する。彼はナポレオンやシーザーといった歴史上の人物に自らの姿を重ねて陶醉し、世界征服や女性たちを支配する野心を密かに抱き、様々な夢想にふける。結局、フェルミナの愛情が得られないことを察したジョアニは、せいりっぱいの口実をつくりあげ、自らのプライドが傷

つく前にフェルミナから離れていく。溢れる感情、自己万能感そして劣等感の間で揺れ動く青春特有の少年心理が、内的独白と共に詳細に描写されている。

このジョアニという少年について、Roger Judrin はスタンダールの『赤と黒』の主人公であるジュリアン・ソレルの「後輩 (cadet)」にあたと分析している。

Léniot est le cadet de Julien Sorel. Même feu patient d'ambition, même fureur de gloire, même honneur chatouilleux, même façon de parier pour l'amour et contre lui. Il a du cœur comme on a des idées. Il a la froideur étincelante des conquérants. [...] M^{me} de Rênal était mariée et Julien était beau. Fermina est une jeune fille et Joanny n'a pas d'agrément dans son visage qui est lourd, immobile et romain. Julien est pauvre, Joanny riche, mais l'un et l'autre ne veulent une maîtresse que pour en faire trophée. C'est leur orgueil qui brûle et qui sera puni de cendre.⁽¹⁵⁾

ジョアニ・レニオは15歳、ジュリアンは19歳であるが、その野心や征服欲、自らの戦利品として女性の心を獲得しようとする発想などがふたりに共通している。つまり、19世紀であれば青年が主人公となって描かれた心理描写が、20世紀においては少年が主人公になったのである。とは言え、ふたりが置かれた状況が大きく異なっているのは言うまでもない。ジュリアンは、下層階級から何とか抜け出して「大人」が築いた階級社会の階段を登って出世すべく、激しい野心を燃やした。一方のジョアニと言えば、経済的に豊かな家庭の子弟であり、舞台は学校という極めて狭い空間である。大人たちに嫌悪感を抱いているが、大人社会を憎むというよりも、むしろいまだ何者でもない、冴えない人間である自分自身を相手に奮闘している印象である。学業において優等生であっても、その他の面において、特に女性に対してうまくふるまえない自らの不甲斐なさ、そして劣等感に苛まれているジョアニ——そうした彼自身のごく個人的な問題に焦点があてられ、心理描写が行われている。学校という閉鎖的空間、それがまだ幼い彼にとっての社会であり、全てである。そこで勝利を得ることが何よりも重要なのである。ふたりが生きた社会的背景が異なれば年齢も異なり、生活する環境に隔りがあるのは当然ではあるが、この苦悩

するジョアニは、子どもとは言え個人の内に大きく焦点が当てられているという点において、いかにも 20 世紀的な子どもの姿であると言える。

3. 子どもをめぐる光と影

すでに見たとおり、子どもは大人社会における異端者なのであり、大人たちに疑問を呈しながら、様々な葛藤を経験する。その姿は、いわば 19 世紀まで付与された象徴的・神秘的イメージから完全に脱却し、現実の困難に直面する血肉を持った生身の人間として、現実の支配下に置かれてしまったとも言えよう。

もはや神秘ではない子どもたち——日常生活で悩みを抱え込み、苦しむ彼らの姿が描かれるようになった。それは実は、子どもは大人と異なるはずが、大人と近い存在になるというというパラドックスを抱えてしまうことにはならないだろうか。実際、ラルボーが 1934 年に書いた日記のなかで、イギリスのカトリック系作家 Alice Meynell の作品 *Essais Enfantine* について、その子どもに対する敬意や愛情を絶賛し、次のように述べている。

[...]; mais ailleurs elle[Alice Meynell] passe à côté du fait que les enfants sont beaucoup plus profondément humains et proches des grandes personnes, du caractère, ou de l'esprit, *adulte*, qu'ils ne le semblent. Beaucoup plus loin d'une simple « nature humaine en croissance », et infiniment plus loin du jeune animal⁽¹⁶⁾.

ここで示されたラルボーの考えでは、子どもは見かけよりもずっと大人や大人の性質、あるいはその精神に近い存在である。大人とは異質であるはずの子ども、しかしその本質において、子供は極めて大人に近い存在だというのだ。大人と異なるところに子どものアイデンティティーが存在するはずが、大人と変わらぬ者であれば、その独自性をどのように解釈すれば良いのだろうか。子どもは完全に大人と同等の人間に「昇格」してしまったのであろうか。

もう一度、子どもをめぐるイメージを思い出そう。子どもは大人に通ら過ぎた時

間を実感させる「過去」である一方、まだ何者でもなく、これから変化する「未来」を象徴する者でもある。そこに「現在」というイメージは欠如している。つまり、現在を生きながらも、どこか非現実的な者として現れる場合があるのだ。ラルボーの場合、とりわけ宗教的な調子が強い作品ほど、子どもの非現実性が強く浮かび上がるように思われる。それはしばしば聖性と結びついたイメージである。

例えば、『ローマの旗の下で (*Aux couleurs de Rome*)』(1938年)に収められているエッセイ風の短編「12歳のミューズのために (*Pour une muse de douze ans*)」⁽¹⁷⁾に登場する少女の描写を見てみよう。作者を思わせる「私」は、イギリスの西部地方にある小さな町で数週間過ごした折、知人の家で Lilian Wade という女の子を見かける。まだ本人も大人も気づいていないであろう美しい顔の持ち主なのだが、その存在の「甘美さ (*la douceur*)」が彼の心に残る。日曜日の朝、好奇心から入ったユニタリアン派の礼拝堂で、偶然彼女と再会する。彼女は礼拝者たちに賛歌の詩集を配布する役らしく、彼にも手渡してくれる。彼女は「21 ページです (*« Page twenty-nine »*)」と言って、彼がきちんと該当ページを広げるかどうか、しばし佇んで見ている。彼はカトリック教会から分離したこの宗派に違和感を覚えつつ、祈りを捧げ、賛歌を歌う彼女の姿に、神に対する深い信仰心を感じる。彼は、彼女は天使そのものであると述べ、そのなかに善意と力強さを見出す。異国の分離派の小教会で出会った少女、という状況が彼女の非日常性をいっそう高めていることも間違いない。彼女会いたさに、翌日曜日にも彼は礼拝堂へ足を運んだ。そして次のように彼女を絶賛する。

この幼き修道女がもたらす繊細で善意に溢れ気高い観念といたら！ 湧き出る純粋さ。どんなけがれも知らぬ愛、精神のように自由で喜ばしい愛。彼女はかつて我々にもたらされたあらゆる礼儀正しさの源泉なのだ。(p.1077)

彼の目には、Lilian の存在がつつましい礼拝室を素晴らしい空間に変えてしまったようにさえ映る。彼は、「Lilian Wade は私を子ども時代の愛情の純粋さへと引き戻してくれたのだった (*Lilian Wade m'avait ramené à la pureté des amours de l'enfance.*) (p.1077)」と思う。美、甘美さ、純粋さ (*la beauté, la douceur, la pureté*) を持ち合わせ

るこの幼い少女の姿に彼は強く感動し、敬虔な彼女の姿を通じて深い信仰心を覚えるのであった。

美、甘美さ、純粋さ——これらの観念は、『幼なごころ』においても頻繁に登場するのは言うまでもない。「ひとりぼっちのグウェニー」を例に挙げれば、主人公が過去に出会った子どもたちを「優しさと純潔さのゆえに愛した少女たち」、「美しい子どもたち (p.531)」などと説明している。「平和と救い」においては、湖のほとりで「幼なごころ」を書いている「彼」が、子どもたちの姿を通じて、自分のなかに謙虚さと無垢を見出す。

その一方で、『フェルミナ・マルケス』の少年ジョアニの、屈折した欲望と挫折の生々しいまでの描写や、あるいは『幼なごころ』の「ローズ・ルールダン」において語られる Lilian Wade と同じ 12 歳だった頃の主人公の様子は、純粋さとは程遠いことを確認しておこう。寄宿生だった時代、ローズは陰気で恨みがましい性格の持ち主で、同性の上級生に恋焦がれる多感な少女であった。また、14 歳の少女の性の目覚めを描いた「十四歳のエリアヌの肖像」も同様の例であろう。俗っぽさと清らかさ、これら両極端なイメージの存在が、ラルポー作品の子どもの特色とは言えないであろうか。それは言わば、子どもをめぐる光と影のイメージである。神々しい光に包まれ、俗世間とは切り離された子どもの姿、その一方で現実に即した人知れぬ悩みを抱える子どもたち。異空間に生きる神秘的な「未知」の存在である一方で、誰もが幼き頃に経験した「既知」の存在でもある。そうした子どもをめぐる豊かなイメージが、ラルポー作品に深みを与えていることは間違いないと言えよう。

使用テキスト

本文中のラルポー作品の引用は Valéry Larbaud, *Œuvres*, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1957 所収の版に基づく。各引用後の括弧内にページ数を記す。引用は既訳を参考にさせていただいた。

ヴァレリー・ラルポー、『めばえ (*Enfantines*)』池田公麿訳、旺文社、1976 年

ヴァレリー・ラルポー、『幼なごころ』岩崎力訳、岩波書店、2005 年

注

- (1) Philippe Arien, *l'Enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime*, Paris, Plon, 1960 (フィリップ・アリエス、『<子供>の誕生』杉山光信・杉山恵美子訳、みすず書房、1980年)
- (2) 例えば『幼なごころ』に関しては拙稿「Deux points de vue sur l'enfant ou l'enfance dans les *Enfantines* de Valery Larbaud」、『年報フランス研究』第39号、関西学院大学フランス学会、2005年、pp.25-34を参照。
- (3) 本田和子、『異文化としての子ども』、ちくま学芸文庫、1992年、p.23
- (4) 山口昌男、「野生の絵本」、『絵本の時代』世界思想社、1979年
- (5) Marina Bethlenfalvy, *Les visages de l'enfant dans la littérature française du XIX^e siècle*, Genève, Droz S.A., 1979, pp.53-84. (第二章「L'Enfant victime」参照)
- (6) 19、20世紀の文学における子どもの描写については、次の資料が参考になる。Marie-José Chombart de Lauwe, *Un Monde autre : l'enfance*, Paris, Payot, 1971
- (7) ラルボー作品における子どもと言葉の関係については、拙稿「子供と『言葉』——ヴァレリー・ラルボーの場合——」、『年報フランス研究』第36号、関西学院大学フランス学会、2002年、pp.41-52を参照。
- (8) Marina Bethlenfalvy, *Les visages de l'enfant dans la littérature française du XIX^e siècle*, Genève, Droz S.A., 1979, p.18.
- (9) 私市保彦、『フランスの子どもの本——「眠りの森の美女」から「星の王子さま」へ』、白水社、2001年、pp.239-240.
- (10) 同書、p.240
- (11) 『バルナブースの日記』邦訳の解説において、岩崎力は次のようにこの作品の特徴を説明している。「これはひとつの *Bildungsroman* (教養小説) なのだ。[...] « 自分一個の生活 » をもちえない青年が、いかにして自己の教養と権力を捨てて一介の人間になったかという過程を描いたものだから。」(ヴァレリー・ラルボー、『バルナブースの日記』岩崎力訳、現代出版社、1969年、p.340)
- (12) Marina Bethlenfalvy, *op.cit.*, pp.115-117.
- (13) 『フェルミナ・マルケス』とラルボーの少年時代の関係については、岩崎力、「ヴァレリー・ラルボーの世界——*Fermina Márquez* をめぐって——」、『東京外国語大学論集』第12号、1965年、pp.1-17に詳しい。
- (14) 『フェルミナ・マルケス』の主人公と語りの形式については、次の拙稿を参照されたい。「ヴァレリー・ラルボー『フェルミナ・マルケス』における対話——語り手と視点の移動——」、『関西フランス語・フランス文学』第8号、日本フランス語フランス文学会関西支部、2002年、pp.57-67.

- (15) Roger Judrin, «L'Auteur de Fermina Marquez», *Hommage à Valery Larbaud, La Nouvelle Revue Française* n°57, 1957,p.122.
- (16) Valery Larbaud, *Journal inédit*, Gallimard, 1954, p.200.
- (17) 1938 年に *la Nouvelle Revue Française* に発表された。Valery Larbaud, *Œuvres*, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1957, pp1075-1078.

(文学研究科研究員)